日本語

ジャワ軍政監部編

卷四

XXXII:-
3208
4.

××××/1-
3208
4

Rp. 293.780

××××/1-
3208
4

日本語

巻四

ジャワ軍政監部編

HAKUBUTU-KAN
博物館
DJAKARTA

もくろく

一　日本のしるし……五
二　日の丸の旗……六
三　君が代……九
四　こひのぼり……十一
五　牛わか丸……十三
六　おたまじゃくし……十六
七　田植……二十一
八　軍かん……二十二
九　かぐやひめ……二十六
十　かがみ……三十三

十一　花さかぢぢい……三十九
十二　時の記念日……四十四
十三　にいさんの入営……四十七
十四　にいさんの愛馬……五十一
十五　電車……五十六
十六　白兎……六十
十七　金の牛……六十六
十八　蛙……六十九
十九　ふなつり……七十二
二十　川をくだる……七十六
二十一　日記……八十二
二十二　カッターのきょうそう……八十七

二十三　軍犬とね……九十二
二十四　稲刈……百四
二十五　祭に友達を呼ぶ……百九
二十六　村祭……百十二
二十七　たちまもり……百十四
二十八　南洋……百十八
二十九　雪の日……百二十六
三十　すがはらのみちざね……百三十四
三十一　ことばづかひ……百三十八
三十二　ようろう……百四十一
三十三　山田ながまさ……百四十六
三十四　三勇士……百五十一
漢字一覧表……百五十八

一　日本のしるし

日本のしるしの
はたがある。
朝日をうつした
日の丸のはた。

日本のしるしの
山がある。
すがたのりっぱな
ふじの山。

日本のしるしの
うたがある。
ありがたいうた
君が代のうた。

二　日の丸の旗

どこの國にも、その國のしるしの、旗があります。日本の旗は、日の丸の旗です。朝日が、勢よく、のぼって行く姿をかいた旗です。

若葉の間にひるがへる日の丸の旗は、たいへん明かるく、海を走る船になびく日の丸の旗は、元氣よく見えます。

青くすんだ空に、高く立てられた日の丸の旗は、たいへんじょうひんで、雪のつもった家の、入口に立てられた日の丸の旗は、暖く見えます。

日の丸の旗は、いつ見ても、ほんとうにりっぱな旗です。

日本人のゐるところには、かならず日の丸の旗があります。どんな遠いところへ行ってゐる日本人でも、日の丸の旗をだいじにして持ってゐます。さうして、日本の國のおめでたい日や、記念の日には、日の丸の旗を立てて、心からおいはひをいたします。

敵軍を追ひはらって、せんりょうしたところに、一番先に高く立てるのは、日の丸の旗です。兵士たちは、この旗のまはり

三　君が代

君が代は
　ちよにやちよに
　　さざれ石の
いはほとなりて
　こけのむすまで

この歌は、
「天皇陛下のお治めになる御代は、千年も萬年もつづいて、おさかえになりますやうに。」といふ意味で、國民が、心からおいはひ申しあげる歌であります。

君が代の歌は、昔から、日本人の先祖が、皇室のみさかえをおいのりして、歌ひつづけて來たものであります。日本人は昔からこの歌をまごころこめて歌ひました。

おいはひの日や、おめでたい式の時には、國民は、この歌を聲高く歌ひます。しせいを正しくして、まごころこめて歌ふと身も心も、ひきしまるやうな氣持になります。

戰地で、兵隊さんたちが、遠い日本へ向かって、聲をそろへて、君が代を歌ふ時には、思はず、涙が日にやけたほほをぬらすさうであります。

また、外國で、君が代の歌を聞くことがあります。その時ぐらゐ、外國に行ってゐる日本人が、日本國民のほこりと喜びと

KANTOR PENERANGAN UMUM DAN KEBUDAYAAN DJAKARTA

を感じることはないといはれます。

語　法

一、◎君が代の歌を聞く**時ぐらゐ**、外國に行ってゐる日本人が、日本國民のほこりと、喜びを感じることはないといはれます。

◎學校へ行く**時ぐらゐ**、うれしいことはありません。

◎**あの人ぐらゐ**しんせつな人はないといはれます。

四　こひのぼり

雨がやんで、日が氣持よくてってゐます。

さをの先の矢車がからからとなると、こひが、大きな口でからだ一ぱいに風をのんで、やねよりもたかく尾をあげます。尾をおろして来てさをにつけるかと思ふと、またはらをふくらませてをどりあがります。そのたびに、こひのかげが地の上をおよぎます。

語法

一、◎尾をおろして来てさをにつけるかと思ふと、またはらをふくらませてをどりあがります。

◎父はかへったかと思ふと、出かけました。

五　牛わか丸

月のよいばんでした。

牛わか丸が、ふえを吹きながらあるいてゐました。ある橋に来ますと、

「待て。」

といふものがゐました。

見ると、大きななぎなたを持つた大男が立つてゐます。

「だれだ。何の用か。」

といひました。

「べんけいだ。その刀がもらひたい。いい刀を千本あつめるつもりで、九百九十九本取つた。もう一本で千本だ。さあ、刀を出せ。」

牛わか丸はびくともしません。

「刀がほしいか。ほしければ取つてみよ。」

といひました。

べんけいは、なぎなたをふりまはして切つてかかりました。

牛わか丸は、すばやくらんかんの上へとびあがりました。

べんけいが上を切ると、牛わか丸は下へとびおります。右を切ると左へとびのき、左を切ると右へとびのきます。べんけいは、へとへとにつかれてしまひました。

その時、牛わか丸は、あふぎでべんけいのうでをたたきました。べんけいは、大きななぎなたをがらりと落しました。べんけいはこうさんして、牛わか丸のけらいになりました。

語　法

一、◎いい刀を千本あつめるつもりで、九百九十九本取りました。

二、◎牛わか丸は、びくともしません。
　◎妹は蛙を見て、びくつとしました。

三、◎べんけいが上を切ると、牛わか丸は下へとびおります。

左を切ると、右へとびのきます。

◎父がかへると、みんなでお茶を飲みます。

六　おたまじゃくし

おたまじゃくしは、毎日、大勢の兄弟や仲間といっしょに、池の中を泳いでゐました。まるで、ありの行列のやうに、あとからあとからつづいて行きました。どれも、これも、まるい頭をふり、長い尾をふって、元氣よく泳いでゐました。

おたまじゃくしは、手も足もなくて泳げるのですから、自分たちの親が、あの四本足の蛙だらうとは、考へてゐませんでした。それよりも、ときどき池の中で見かけるこひやそのほかの

さかなが、親だらうと考へました。また、小さなめだかを見る

さかなが、親だらうと考へました。また、小さなめだかを見ると、これも、自分たちの仲間ではないかと思ひました。

けれども、おたまじゃくしには、たくさんの兄弟があるのですから、親のそばにゐなくても、ちっともさびしくはありませんでした。また、めだかやそのほかのさかなといっしょに、遊ばなくてもいいのでした。

春の日は、だんだん過ぎて行きました。水草が青々とのび、水の上には、ときどきとんぼがとんで来て、かげをうつすことがありました。このごろになると、おたまじゃくしは、尾のついてゐるところが、少しふくれて来ました。初めは、氣がつきませんでしたが、のちには、だんだんふくれ出して、とうとう、

それが二本のかはいらしい足になりました。

おたまじゃくしは、少しおそろしいやうな、うれしいやうな氣がして、わいわいさわいでゐました。さうして、ときどき、水の上へ、顔を出してみました。それから、また何日かたちました。今度は、胸の兩わきが破れて、そこからも二本の足が出ました。

四本足になつたおたまじゃくしは、尾が、だんだん短くなつて行きました。さうして、水の中にゐるのが、いやになつて來た。水の上へ顔を出すと、何だか息がつまるやうな氣がしました。水の上へ顔を出すと、氣がせいせいするやうに思はれまし

ある日、岸の草につかまって、池の外へ出て見ました。もう夏の初めでした。草が、青々とのびてゐました。空には、日が、ぎらぎら光ってゐました。

あと足を曲げて、前足をついてすわった姿は、これまでのおたまじゃくしではありませんでした。かうして、陸へあがったたくさんの子蛙は、草のかげのあちらこちらを、うれしさうにとびまはりました。

語法

一、◎おたまじゃくしは、まるで、ありの行列のやうに、つづいて行きました。

◎ハリさんは、**まるで**、日本人**のやうに**、日本語が話せます。

二、◎どれも、これも、まるい頭を**ふり**、長い尾を**ふつて**、元氣よく泳いでゐました。

◎おたまじゃくしは、まるい頭を**ふつて**泳ぎます。

三、◎おたまじゃくしは、自分たちの親が、四本足の蛙**だらうと**は、考へてゐませんでした。

◎池の中で見かけるこひやそのほかのさかなが、親**だらうと**考へました。

七田植

そろた、出そろた、
さなへがそろた。
植ゑよう、植ゑましょ、
み國のために。
米はたからだ、たからの草を、
植ゑりゃ、こがねの花が咲く。

そろた、出そろた、
植ゑ手もそろた。

植ゑよう、植ゑましょ、
み國のために。
　ことしゃほう年、穂に穂が咲いて、
みちの小草も米がなる。

八　軍かん

春男さんは、軍かんが大すきです。まだ、ほんとうの軍かんを見たことがありませんが、をぢさんにもらったゑを見たり、をぢさんのお話を聞いたりして、軍かんのことはよく知ってゐました。をぢさんは海軍の軍人さんです。
春男さんは、せんかんや、じゅんようかんや、くちくかんや、

せんすいかんなどのことをよく知ってゐます。

春男さんにせんかんのことを聞くと、かう答へます。

「せんかんは、一番大きくて、一番がんじょうな軍かんです。まるで、海にうかんだ城のやうです。大きな大砲がいくつもあって、てきの軍かんをどしどしうちます。ぼくは、せんかんが大すきです。」

かういったあとで、きっと、

「でも、じゅんようかんはゆかいな軍かんです。せんかんよりもずっと早く走れて、形がすっきりしてゐます。ぼくは、あれにのって、せかい中の海をのりまはしてみたい。」

といひます。

「一ばん早いのは、じゅんようかんですか。」

とたづねますと、

「いいえ、それはくちくかんです。小さくて、かるくて、ぐんぐん走ります。小さくてもぎょらいで、大きな軍かんを沈めることが出来ます。」

と答へます。

「もっとほかの軍かんはありませんか。」

と聞きますと、

「それは、せんすいかんとこうくうぼかんです。せんすいかんは、魚のやうに、海の中をもぐつて進みます。こうくうぼかんは、廣いかんぱんから、ひこうきをいくつもいくつもとばします。」

します。」

と答へます。

春男さんは、をぢさんのやうに、海軍の軍人さんになるといってゐます。

語　法

一、◎春男さんは、をぢさんにもらつたゑを**見たり**、をぢさんのお話を**聞いたり**して、軍かんのことはよく知つてゐました。

◎私はきのふうちにゐて本を**讀んだり**、手紙を**書いたり**しました。

二、◎せんかんは、海にうかんだ城のやうです。

◎せんすいかんは、魚のやうに、海の中をもぐって進みます。

◎春男さんは、をぢさんのやうに、海軍の軍人さんになるといってゐます。

九　かぐやひめ

昔、竹取のおきなといふおぢいさんがゐました。毎日竹を切って来て、ざるやかごを作ってゐました。

ある日、根もとのたいそう光ってゐる竹を、一本見つけました。その竹を切って、わって見ますと、中に小さな女の子がゐました。

おぢいさんは喜んで、その子を手のひらにのせて、うちへかへりました。小さいので、かごの中に入れて、おばあさんと二人でそだてました。

この子を見つけてから、おぢいさんの切る竹には、ときどき金がはいつてゐました。おぢいさんは、だんだんお金持になりました。

この子は、ずんずん大きくなりました。三月ほどたつと、もう十七八ぐらゐの美しいむすめになりました。おぢいさんは、この子にかぐやひめといふ名をつけました。

人々は、美しいかぐやひめの話を聞いて、

「むすこの嫁にしたい。」

「いや、うちの嫁にもらひたい。」などといってゐました。たいへんすなほなかぐやひめでしたが、いつも、

「私は、どこへも行きたくありません。」

といって、おぢいさんにことわってもらひました。

かうして、何年かたちました。ある年の春のころから、月の明かるい晩には、かぐやひめは月を眺めて、じっと考へてゐるやうになりました。

八月の十五夜近くなったある夜、かぐやひめは聲をたてて泣きました。

おぢいさんとおばあさんは、大さわぎです。かぐやひめは、

「なぜ泣くのか。」と聞かれて、はじめはだまってゐましたが、しまひに悲しさうに答へました。

「私は、もと、月の世界のものでございます。長い間おせわになりましたが、この十五夜には、月の世界から迎へにまゐりますので、かへらなければなりません。私は、お二人にお別れするのが、何よりも悲しうございます。」

このことばを聞いて、おぢいさんもおばあさんもびっくりしました。

「それはたいへんなことだ。だが、迎へに来てもけっしてわたさないから、安心して、泣くことはやめなさい。」

と、おぢいさんがいひました。

おぢいさんは、なんとかしてかぐやひめを引止めたいと思ひました。

おぢいさんはいろいろ考へたあとで、このことをとのさまに申しました。するととのさまは、

「それはかはいさうだ。よし、その晩けらいたちをたくさんやって、おまへのうちを守らせよう。」

とおっしゃいました。おぢいさんの家のまはりを、いよいよ十五夜になりましたた。いくへにもかこみました。

弓矢を持ったとのさまのけらいたちが、

おばあさんは、へやの戸をみんなしめて、しっかりとかぐや

ひめをだいてみました。おぢいさんは、そのへやの入口に立って番をしてみました。

夜中ごろになると、あたりが急に明かるくなりました。

「さあ、来たぞ。」

と、とのさまのけらいたちは、弓に矢をつがへましたが、ふしぎに手足の力がなくなって、どうすることもできませんでした。

その時、大勢の天人が、雲に乗っておりて来ました。すると、かたくしめたへやの戸が、ひとりでにあきました。おばあさんの手に、しっかりとだかれてみたかぐやひめのからだは、ひとりで外へ出て行きました。もう、だれの力でも、どうすることもできませんでした。かぐやひめは、おぢいさんとおばあさんに、

「とうとうお別れしなければならない時がまゐりました。お二人のごしんせつはけっして忘れません。どうぞ、月の夜には、私のことを思ひ出してください。

私も、あの月の世界から、お二人を拝んでをりませう。」

といって、天人の持って来た車に乗りました。

かぐやひめを乗せた車は、大勢の天人にかこまれながら、しづかに天へのぼって行きました。

語　法

一、◎昔、竹取のおきなといふおぢいさんがゐました。おぢいさんは、この子にかぐやひめといふ名をつけました。

二、◎私は、お二人にお別れするのが、何よりも悲しうございます。

◎私は、あなたにお話したいと思ひます。

三、◎おぢいさんは、このことをとのさまに申しました。

◎とのさまは、「それはかはいさうだ。」とおっしゃいました。

十　かがみ

ねえさん

花子さんは、日のあたるところへ、小さなかがみを、持って出ました。

かがみで日の光を受けると、きらきら光ります。花子さんは、その光を、二かいの窓のしょうじにあてて見ました。すると、そのしょうじをあけて、中からねえさんがそとを見ました。花子さんは、ねえさんの顔へ光をあてました。ねえさんは、

「おお、まぶしい。」

といって、手で顔をかくしました。さうして、

「いたづらな花子さんね。」

といって、笑ひました。

をんどり

勇さんが、えんがはで、かがみを持って遊んでゐました。そ

こへ、勇さんによくなれたをんどりが、ゑさがもらへるのかと思って、やって来ました。

勇さんは、をんどりにかがみを見せました。

をんどりは、ちょっとおどろいて、逃げださうとしましたが、急にひきかへして、かがみの方へよって来ました。

をんどりは、首の毛をさか立てて、かがみにうつった自分のかげをめがけて、とびついて来ました。かがみの中のをんどりも首の毛をさか立ててゐました。

「おや、自分のかげを、ほかのをんどりと思ってゐるのだな。」

と、勇さんは思ひました。

をんどりは、力いっぱい鏡をくちばしでつつきました。

たいへんなけんかになりました。

勇さんは、かはいさうに思って、かがみをひっこめました。

すると、をんどりは、元氣よく羽ばたきをしながら、

「こけこっこう。」

と聲高く歌ひました。

おかあさん

昔、孝行な娘がゐました。おかあさんが、長い間病氣でねてゐましたので、晝も夜も、一心にかいほうしましたが、病氣はだんだんわるくなって行きました。

ある日、おかあさんは娘をそばへ呼んで、何か包んだ物をわ

たしました。

「これをおまへにあげるから、だいじにしまっておきなさい。もしおかあさんにあひたかったら、これをあけてごらんなさい。」といって、おかあさんは、まもなくなくなってしまひました。

娘は泣いて悲しみましたが、しかたがありません。それから は、おとうさんと二人でさびしくすんでゐました。

娘は、ふと、おかあさんのくださった物のことを思ひ出しました。そっと、へやへはいって、包をあけて見ますと、中から出たのは、一枚のかがみでした。

まだ、かがみが、めづらしいころのことでしたから、娘には、それが何であるかわかりませんでした。

そっとのぞいて見ると、女の顔がうつってゐます。子どものやうですが、なくなったおかあさんにそっくりでした。娘は思はず、

「おかあさん。」

といって、かがみをだきしめました。

語法

一、◎勇さんによくなれたをんどりが、ゐさがもらへるかと思って、やって来ました。

◎今日勇さんが遊びに來ます。

◎正男さんも來ると思ひます。

◎正男さんの妹さんの花子さんも來るかと思ひます。

二、◎娘には、かがみが何であるかわかりませんでした。

◎これは何ですか。

十一、花さかぢぢい

昔、ある所に、おぢいさんがゐました。犬を一匹かって、たいそうかはいがってゐました。

ある日、犬が畠のすみで、

「わんわん、わんわん。」

となきました。

おぢいさんは、ふしぎに思って、そこをほって見ますと、土

の中から、おかねやたからものが、たくさん出ました。

となりのおぢいさんは、よくの深い人でした。この話をきいて犬をかりに来ました。さうして、むりに犬をなかせて、畠をほって見ますと、きたないものばかり出ました。おぢいさんは、おこって犬をころしてしまひました。

犬をかはいがってゐたおぢいさんは、たいそうかなしみました。犬のお墓を作って、小さな松を一本うゑました。

松は、ずんずん大きくなりました。おぢいさんは、その松の木で、うすをこしらへました。それで米をつくと、お金やたからものが、たくさん出ました。

となりのおぢいさんは、又そのうすをかりに来ました。さう

して米をついて見ますと、きたない物ばかり出ました。又おこってうすをこはして、火にくべてしまひました。

犬をかはいがってゐたおぢいさんは、その灰をもらって来ました。すると、風が吹いて来て、灰をとばしました。それが、かれ木の枝にかかったかと思ふと、一どにぱっと花が咲きました。

おぢいさんは喜びました。灰をざるに入れて、

「花を咲かせます、花を咲かせます。かれ木に花を咲かせます。」

といって、歩きました。

とのさまがお通りになって、

「これはおもしろい。花を咲かせてごらん。」

とおっしゃいました。

おじいさんは木にのぼって、灰をまきました。すると、かれ木に花が咲いて、一どに花ざかりになりました。

とのさまは、

「これはふしぎだ。きれいだ、きれいだ。」

とおほめになって、ごほうびをたくさんくださいました。

となりのおじいさんは、のこってゐた灰をかきあつめて、かれ木にのぼって、とのさまのおかへりをまってゐました。そこへ、とのさまがお通りになって、

「もう一ど、花を咲かせてごらん。」

とおっしゃいました。

おぢいさんは、灰をつかんでまきました。いくらまいても、花は咲きません。しまひに、灰が、とのさまの目や口にはいりました。

とのさまは、

「これはにせものだ。わるいやつだ。」

とおっしゃいました。

おぢいさんは、とうとうしばられてしまひました。

語法

一、◎おぢいさんはふしぎに思つて、そこをほつて見ますと、土の中から、おかねやたからものが、たくさん出まし

た。

◎かれ木に花が咲いて、一どに花ざかりになりました。

◎私は大きくなつて、軍人になりたいのです。

十二　時の記念日

六月十日は、時の記念日です。

今から千三百年ばかり前のこの日に、てんぢ天皇はごじしんでお作りになつた水時計で、始めて、みんなに時をお知らせになりました。

てんぢ天皇の、お作りになつた水時計は、水のもれるしかけで、時をはかる時計です。

今では、はしら時計や、おき時計や、うで時計などが、たくさんあつて、正しい時を知らせてくれますが、昔の人は、どうしたら時がわかるかと、いろいろ考へました。

しかし、どんなにりっぱな時計があつても、私たちは、時を知るだけでなく、時を正しく守るやうに、心がけなければ何にもなりません。

學校の授業は、時間通りにされます。家にかへつてからのふくしゅうも、運動も、ごはんも、時をきめて、よく守らなければなりません。さうでないと、人にめいわくをかけるばかりでなく、からだが弱くなつたり、病氣になつたりします。

時を守ることは、やさしいやうでも、なかなかむづかしいこ

とです。時計を見るたびに、私たちは、正しく時を守るやうに心がけませう。

時の記念日を記念して、みんなで、きまりよくするやうに心がけませう。

語法

一、◎てんぢ天皇は、ごじしんでお作りになつた水時計で、始めて、みんなに時をお知らせになりました。

◎てんぢ天皇のお作りになつた水時計は、水のもれるしかけで、時をはかる時計です。

◎私の作つたはこは、小さいのです。

二、◎どんなにりっぱな時計があつても、私たちは、時を知るだけでなく、時を正しく守るやうに、心がけなければ何にもなりません。

◎どんなにむづかしくても、習はなくてはなりません。

十三　にいさんの入營

青年學校の服を着て、赤いたすきをかけたにいさんは、しんるいの人たちに送られて、兵營の門まで來ました。

にいさんは、ここでみんなにあいさつをして、門の中へはいりました。私もおとうさんとはいりました。

門をはいると、えい兵所があつて、そこに、兵たいさんが七

八人腰をかけてゐました。

廣い庭の中ほどには、立札が何本も立ててありました。

にいさんは、兵たいさんにあんないされて、そちらへ行きました。にいさんと同じやうな人が、たくさんゐました。

金すぢのえりしょうをつけた兵たいさんが來て、名を呼始めました。だんだん呼んでいって、

「山田一郎。」

と、にいさんの名を呼びました。にいさんは大きな聲で、

「はい。」

と答へました。私は、自分が呼ばれたやうに思ひました。

廣い庭の向かふに兵舍が立ってゐます。そこへにいさんたち

は行きました。

おとうさんと私は、つきそひの人たちの休むところで待ってゐました。馬に乘った軍人さんが、門をはいって來ると、えい兵所にゐる兵たいさんが、

「けいれい。」

と元氣な聲でいって、立ってけいれいをしました。

まもなく、新しい軍服を着た一人の兵たいさんが、私たちのところへ來ました。見ると、それがにいさんでした。見ちがへるほどりっぱな兵たいさんになってゐたので、私はびっくりしました。にいさんは、

「おとうさん、お待たせいたしました。國男、これはにいさん

が着てゐた服だ。おまへ持つてかへつておくれ。」
といつて、ふろしき包をわたしました。
　にいさんの赤いえりしようには星が一つついてゐました。お
とうさんはにこにこして、これなら、お國のためにはたらけ
「りつぱな兵たいさんだな。
るだらう。しつかりたのむよ。」
とおつしやいました。

語法

一、◎門をはいると、えい兵所があつて、そこに兵たいさん
が七八人腰をかけてゐました。

◎馬に乗った軍人さんが、門をはいって來ると、えい兵所にゐる兵たいさんが、立ってけいれいをしました。

◎見ると、それがにいさんでした。

二、◎にいさんは、しんるいの人たちに送られて、兵營の門まで來ました。

◎にいさんは、兵たいさんにあんないされて、そちらへ行きました。

◎私は自分が呼ばれたやうに思ひました。

十四　にいさんの愛馬

國男、今日は、軍隊の馬のことを知らせてあげませう。毎朝、

にいさんたちは、きっと馬屋へ行きます。馬が、ちゃんと待ってゐるからです。

馬屋へ行って、馬をねどこから外へつれ出し、ひづめを洗ひ、鐵で作ったくしとはけで、馬のからだをこすって、きれいにしてやります。すると、馬は、おとなしくじっとしてゐます。氣持がよくて、うれしいのでせう。

入營したばかりのころは、馬のそばへ近寄ることが、こはかったのです。「おーら、おーら。」といひながら、こはごは馬に近づきました。馬は、おとなしくしてゐました。それでも、馬の足をかかへて、ひづめを水で洗ってやるのには、なかなか勇氣がいりました。もう、今では、なれてしまって、そんなこと

は何でもなくなってしまひました。

あたたかい馬のからだや、すべすべした、やはらかい毛なみにさはると、もう、手入れをしないではゐられなくなります。自分の馬が、ほかの馬にくらべて、少しでもきたないと、何だか馬にすまない氣がします。それで、手入れにむちゅうになります。

これほど、毎日馬をかはいがってやると、馬の方でも、ちゃんとにいさんをおぼえてしまって、「ひひん。」とないて、大きな目で、じっとにいさんを見つめます。

國男のすきなうちの犬を、「しろ、しろ。」と呼ぶと、しろが尾をふってとんで來るやうに、にいさんの愛馬やすともも、「や

す、やす。」といってやると、いかにもうれしさうに前足をあげて、かるく地面をたたきます。かうなると、もう馬ではなくなって、まったくの友だちになってしまひます。だから、自分のかはいがった馬のことは、いつまでも忘れられないで、お正月には、馬にあてて、あいさつの手紙をよこす兵隊さんもありまず。

にいさんは、いつも、腰にふくろをさげてゐます。愛馬ぶくろといって、その中には、馬のだいすきなにんじんがはいってゐるのです。

いつか國男にも、にいさんの愛馬を、ぜひ見せたいと思ってゐますが、その時は、きっと、にんじんを忘れないやうに頼み

ます。

語　法

一、◎今日は軍隊の馬のことを知らせてあげませう。
◎馬屋へ行つて、馬のからだをこすつて、きれいにしてやります。
◎馬の足をかかへて、ひづめを水で洗つてやるのには、なかなか勇氣がいります。

二、◎馬のからだや、すべすべした、やはらかい毛なみにさはると、手入れをしないではゐられなくなります。
◎自分の馬が、ほかの馬にくらべて、少しでもきたない

と、何だか馬にすまない氣がします。

◎毎日、馬をかはいがつてやると、馬の方でも、にいさんをおぼえてしまひます。

十五　電車

にいさんと、電車に乗りました。

人がいつぱい乗つてゐて、あいてゐる席は、一つもありませんでした。私が、にいさんと並んで立つてゐますと、すぐ前に、掛けてゐた知らないをぢさんが、私の顔を見ながら、

「ぼつちやん、ここへお掛けなさい。」

といつて、立つてくださいました。私は、

「いいのです。ぼく、立ってみますから。」

といひましたが、をぢさんは、

「いや、わたしは、もうぢきおりますから、いで、お掛けなさい。」

といひながら、あちらへ行きました。

「どうも、ありがたう。」

と、にいさんがいひました。

「ありがたう。」

と、私もいひました。

「をぢさんが　あけてくださったのだから、おまへ、お掛けなさい。」と、にいさんがいひましたから、私は掛けました。

次のていりゅうじょうへ来た時、をぢさんは、そこでおりるのかと思ったら、おりませんでした。

それから、二つ三つていりゅうじょうを過ぎて、西町まで来ますと、人がたくさんおりて、席があきました。をぢさんも、ここでおりました。にいさんは、私のそばへ掛けました。

しかし、入れ代りに、大勢の人が、どやどやとはいって来ました。席はみんなふさがってしまひました。立ってゐる人も、たくさんありました。

いちばんあとからはいって来たのは、七十ぐらゐのおばあさんと、赤ちゃんをおぶったをばさんとでした。すると、にいさんが、小さな聲で、

「立たう。」

「立たう。」
といひました。
おばあさんとをばさんが、ちょうど私たちの前へ來た時、私たちは、すぐ立つて、席をゆづりました。二人は喜んで、
「どうも、ありがたうございます。」
といひながら、ていねいにおじぎをして、掛けました。
電車は、また動きだしました。

語法

一、◎知らないをぢさんが、私の顔を見ながら、「ぼっちゃん、ここへお掛けなさい。」といって、立ってください

ました。

◎二人は喜んで、「どうも、ありがたうございます。」と
いひながら、ていねいにおじぎをして、掛けました。

二、◎知らないをぢさんが、立ってください**ました**。

◎「をぢさんが、あけてくださったのだから、お前、お
掛けなさい。」と、にいさんがいひました。

十六　白兎

白兎が、島から向かふの陸へ行ってみたいと思ひました。
ある日、はまべへ出て見ると、わにざめがゐましたので、
「君の仲間とぼくの仲間と、どちらが多いか、くらべてみませ

う。」

といひました。わにざめは、

「それはおもしろいでせう。」

といって、すぐに仲間を大勢つれて来ました。白兎はそれを見て、

「君の仲間はずいぶんたくさんゐますね。ぼくらの方が負けるかもしれません。ぼくが君らのせなかの上を、かぞへながらとんで行くから、向かふの陸まで並んでみてください。」

といひました。

わにざめは、白兎のいふとほりに並びました。白兎は、「一つ、二つ、三つ、四つ。」とかぞへながら渡って行きました。

もう一足で陸へあがる時、白兎は、
「君たちはうまくだまされましたね。ぼくはここへ渡って来たかったのです。あははは。」
といって、笑ひました。
わにざめはそれを聞くと、たいそうおこりました。一番しまひにゐたわにざめが、白兎をつかまへて、からだの毛をみんなむしり取ってしまひました。
白兎は痛くてたまりませんから、はまべでしくしく泣いてゐました。その時、大勢の神様がお通りになって、
「おまへ、なぜ泣いてゐるのか。」
とおたづねになりました。白兎が今までのことを申しますと、

神様は、

神様は、

「それなら、海の水をあびて、ねてゐるがよい。」

とおっしゃいました。

白兎はすぐ海の水をあびました。すると、痛みがいっそうひどくなって、たまらなくなりました。

そこへ大國ぬしのみことといふ神様がおいでになりました。

このかたは、さきほどお通りになった神様がたの弟さんです。

兄様がたの重いふくろをせおっていらっしゃいましたので、おそくおなりになったのです。

この大國ぬしのみことも、

「おまへ、なぜ泣いてゐるのか。」

とおたづねになりました。白兎は泣きながら、また今までのことを申しました。大國ぬしのみことは、

「かはいさうに。早く川の水でからだを洗って、がまのほをしいて、その上にころがるがよい。」

とおっしゃいました。

白兎がそのとほりにしますと、からだは、すぐまへのやうになりました。喜んで大國ぬしのみことに、

「おかげですっかりなほりました。あなたは、おなさけ深いおかたですから、今は重いふくろをせおっていらっしゃいましても、のちにはきっとえらいおかたにおなりでせう。」

と申しました。

語　法

一、◎わにざめは、白兎のいふとほりに並びました。
◎白兎がそのとほりにしますと、からだは、すぐまへのやうになりました。

二、◎白兎は、痛くてたまりませんから、はまべでしくしく泣いてゐました。
◎私はあたまがいたくてたまらないのです。
◎すると、痛みがいつそうひどくなってたまらなくなりました。

十七　金の牛

これはまんしゅうの話です。

海の中に、小さな島がありました。その島に、一匹の金の牛がゐました。

おなかがすいたので、草をたべようと思って、あちらこちら歩きましたが、この島には、一本の草も生えてゐませんでした。

金の牛は、小高い岩の上にあがって、四方を見わたしました。海の向かふに、もう一つ島が見えました。その島には、みどりの草が一めんに生えてゐました。

「なんとおいしさうな草だらう。一口たべたいなあ。」

と、金の牛は、ひとりごとをいひました。すると、ふしぎに今

と、金の牛は、ひとりごとをいひました。すると、ふしぎに今まですいてゐたおなかが、急にいっぱいになりました。

次の日も、金の牛は、岩の上にあがって、みどりの島を眺めました。やはり、おなかがいっぱいになって、よい氣持になりました。

かうして、金の牛は、おなかがすくと、みどりの島を眺めて、おなかをいっぱいにしました。このために、金の牛は、おなかがすいて困ることはありませんでした。

ところで、ある日のこと、金の牛は、ふとこんなことを考へました。

「ここから見るだけでも、おなかがいっぱいになるのだから、

あの島の草をほんとうにたべたら、どんなにおいしいだらう。」

金の牛は、もう、じっとしてゐられなくなりました。いきなり海をめがけて、どぶんとびこみました。

金の牛は、自分のからだが金であったことを、すっかり忘れてゐたのです。そのまま海に沈んでしまひました。

語法

一、◎今までですいてゐたおなかが急にいっぱいになりました。

◎金の牛は、みどりの島を眺めて、おなかをいっぱいにしました。

二、◎金の牛はおなかがすいて困ることはありませんでした。

◎私はおなかがすいて困ることがあります。

◎私はおなかがすいて困ることがあります。
◎父は、ひこうきにのったことがあるさうです。私はまだのったことはありません。

十八　蛙

蛙の子どもが、川ばたで遊んでゐました。
そこへ牛が來て、水をのみました。子蛙は、びっくりしてうちへかへりました。
おとうさん蛙とおかあさん蛙に、
「大きな、大きなばけものが、水をのみに來ましたよ。」
といひました。

きんじょにゐた大蛙が、それを聞いて、

「その大きなばけものは、わたしぐらゐありましたか。」

といひました。

子蛙は、

「どうしてどうして、今まで見たこともないほど大きいのです。」

と答へました。

大きいのがじまんの大蛙は、うんといきを吸ひこんで、おなかをふくらませました。

「そんなら、このくらゐもありましたか。」

「とても、そんなものではありません。」

「では、このくらゐですか。」

といって、大蛙はいっそうふくらませました。

子蛙は、

「をぢさん、およしなさい。どんなにおなかをふくらませても、かなひませんよ。」

といひました。

しかし、大蛙は、こんどこそと、力いっぱいいきを吸ひこみました。おなかは、まるでふうせん玉のやうにふくれました。すると、「ぽん。」と大きな音がして、大蛙のおなかはやぶれてしまひました。

語　法

一、◎今まで見たこともないほど大きいのです。
◎私は、今まで金の牛を見たことはありません。
◎私は、今まで金の牛を見たことはないのです。
二、◎どんなにおなかをふくらませても、かなひません。
◎いくらむづかしくても、習ひます。
三、◎おなかは、まるでふうせん玉のやうにふくれました。
◎あの方は、まるで日本人のやうです。

十九　ふなつり

「このへんが、つれさうだね。」
と、にいさんが、小川をのぞきこんでいひました。

水草が、たくさん生えてゐました。きっと、魚がかくれてゐ

水草が、たくさん生えてゐました。きっと、魚がかくれてゐるにちがひありません。私たちは、急いでつりのしたくをしました。

にいさんが、ひゅっと、つり竿をふると、つり糸が、空に大きなわをゑがきました。ぽんと音をたてて、うきが水の上へ落ちると、波のわができて、それがだんだん大きくひろがりました。にいさんと並んで、私もつり始めました。

二人は、じっと、うきを見つめました。

あたりはしづかで、ときどき、川かみの板橋の上を通る荷車のひびきだけが、聞えて来ます。

ぴく、ぴく、ぴく——にいさんのうきが動きました。にいさ

んは、あわてて引きあげました。
「なんだ、ゑさを取られたのか。」
と、つまらなささうに笑ひました。
空の雲が水にうつって、うごきのそばを、ゆっくり流れて行きます。
ぐぐ、ぐぐっと、今度は私のうきが、水の中へ引きこまれました。強い手ごたへが、つり竿をつたはって来ました。はっと思って引きあげようとすると、重くてなかなかあがりません。つり糸がぴんとはって、つり竿の先が、おじぎをするやうに、しきりに動いてゐます。
「五郎、おちついてあげるんだよ。」
と、にいさんがいひました。

と、にいさんがいひました。
にいさんと二人で、氣をつけながら引きあげると、大きなふながが、水ぎはでぴちぴちはねて、うろこがきらきらと光りました。

語法

一、◎このへんが、つれさうだね。
◎雨がふりさうですね。

二、◎きっと、魚がかくれてゐるにちがひありません。
◎弟は今日歸るにちがひありません。

三、◎にいさんがつり竿をふると、つり糸が、空に大きなわ

をゑがきました。

◎うきが水の上へ**落ちると**、波のわができました。

四、◎はっと思って引きあげ**ようとすると**、重くてあがりません。

◎けさ出かけ**ようとすると**、友達が來ました。

二十　川をくだる

私は、一度、川にそって川口まで行ってみたいと思ってみました。

おとうさんが、許してくださったので、きのふの日曜日に、にいさんと二人で出かけました。

朝つゆにしめった小道を通って行くと、川の岸へ出ました。

朝つゆにしめった小道を通って行くと、川の岸へ出ました。
流れが急で、白い波が、石と石との間にわき返ってゐました。
岸は、青葉で、おほはれてゐますが、ところどころに、赤い
花が咲いてゐました。にいさんといっしょに、唱歌を歌ひまし
た。すると、川の音も、同じ唱歌を歌ってゐるやうに聞えまし
た。

茂った竹やぶがあって、しばらく川が見えなくなりましたが、
「ど、ど、ど、ど。」といふ水の音が聞えて來ました。川が、た
きになって落ちてゐるのでした。
ときどき、流れがゆるやかになって、水が青々といっぱいに
なってゐました。川原の石の上を、小鳥がとんでゐました。

しばらく行くと、向かふの岸から、小川が流れこんで來ました。こちらの岸からも、小川がそそぎこんでゐます。ちょうど親の手に、子どもがすがりつくやうでした。

まもなく、川の近くにある停車場に着きました。汽車が來たので、それに乗りました。汽車が走り出すと、すぐトンネルにはいりました。出ると、高いところを走ってゐるので、川は、ずっと下の方に見えました。

だんだん兩岸が開けて來て、川はばが廣くなりました。ところどころに中すがあって、小さな木が生えてゐました。川はおだやかになって、音もなく流れてゐます。

汽車が鐵橋を渡ると、今まで左手を流れてゐた川が、右手を流れて、日の光をあびて、まぶしいほど光りました。

流れて、日の光をあびて、まぶしいほど光りました。

村のふみきりを通る時、子どもがこちらを見て、ばんざいをしてみました。

渡し場がありました。船頭さんが、舟をこいでみました。舟には、子牛も乗ってみました。

汽車が止ったので、私たちはおりました。

今度は、そこから馬車に乗って、川口の町まで行くことにしました。

「ポポー――。」と、ラッパを鳴らしながら、川岸の道を走って行きました。

そのへんは麥畠で、麥のほが出そろって、一めん黄いろくなっ

てみました。

川の向かふ側に、工場があって、高いえんとつから、茶色の煙が出てゐました。川の水は、すんではゐませんが、青い空をうつしながら、ゆっくりと流れて行きます。

町の入口で、私たちは馬車をおりました。あみを干してあるのが、あちらこちらに見えました。車にかつををたくさんつんで、いせいよく引いて行くのに出あひました。

町を通りぬけて、川口に近い岸に立つと、海が見えました。舟が、何ぞうもつながれてゐました。川の水は、ここで海へ流れこんでゐます。

頭のすぐ上を、かもめが、五六羽とんで行きました。いその

かをふくんだ風が、そよそよと吹いてゐました。

かをふくんだ風が、そよそよと吹いてゐました。

その夜、私は、次のやうなことを書いて、おとうさんにお目にかけました。

川は、初め走って流れてゐました。

白い波をたてて、走ってゐました。

つかれると、ときどき木かげに休んだり、さうかと思ふと、急に高いところからとびおりたりします。

小さな川と、仲よく手をつないで、川は、いつのまにか大きくなります。

きらきらと光って笑ったり、青くすんで、じっと考へこんだりします。

川にも、いろいろな心持があるやうに思ひました。

語法

一、◎川の音も同じ唱歌を歌ってゐるやうに聞えました。
◎ちょうど親の手に子どもがすがりつくやうでした。
◎川にも、いろいろな心持があるやうに思ひました。

二十一　日記

七月十六日　月曜日　晴

朝起きると、おとうさんは、もう庭の朝顔のせわをしていらっしゃいました。

「ほうら、こんな大きな、赤い花が二つ咲いた。」

「ほうら、こんな大きな、赤い花が二つ咲いた。」
と、にこにこ顔でした。

學校では、三時間めに、三年生以上の體操がありました。暑い夏の日が、てってみる中で、行進をしたり、かけ足をしたり、體操をしたりしました。

七月十七日　火曜日　晴

けさは、朝顔が三つ咲いてみました。水色が二つ、赤が一つでした。

學校では、四時間めに、みんなで作業をしました。ぼくたちは、校舎のうらの草をむしりました。先週の金曜日に抜いたのに、のびた草がもうたくさんありました。一本一本きれいに抜

きました。とし子さんが「きゃっ。」といったので、見ると大きなみみずがゐました。先生が、「みみずぐらゐに、どうしてそんな聲をたてるのです。」とお笑ひになりました。

七月十八日　水曜日　くもり

くもってゐるためか、朝からむし暑い日でした。朝顔は、二つ咲いてゐました。赤が一つ、白が一つでした。

三時間めの體操の時は、汗でべとべとしました。夏は、つよくてった方が、氣持がいいと思ひました。

夕はんがすんでから、おかあさんと、ねえさんと、ぼくと三人で、えん日へ行って、くつわ虫を買ってかへりました。ねる

時には、大きな聲で鳴いてゐました。

時には、大きな聲で鳴いてゐました。

七月十九日　木曜日　晴

朝起きると、すぐくつわ虫を見ました。元氣なので、安心しました。きうりを少しやりました。

學校からかへってみると戰地の兵隊さんから、はがきが來てゐました。この前、いもんぶくろと、いもん文を送ったので、そのへんじでした。送ってあげたつりどうぐで、魚をつるのが樂しみだと書いてありました。

七月二十日　金曜日　晴

今日は、海の記念日です。朝禮の時間に、そのお話がありました。教室で、先生から、

「今日は、どうして海の記念日になったのでせう。」
と聞かれた時、
「明治九年の今日、明治天皇が、明治丸といふ船でほっかいどうから、よこはまへおかへりになったからです。」
と、お答へしました。
ラジオは、一日中、海のお話や、音樂で、にぎやかでした。

語法

一、◎先週の金曜日に抜いたのに、のびた草が、もうたくさんありました。
◎あの人は雨がふってゐるのに、出かけました。

二十二　カッターのきょうそう

今日は、海の記念日で、海軍のカッターのきょうそうがありました。

空は、よく晴れて、白いかもめが、海の上を、かるくとんで行きます。青い波の上に、赤・白・黄・みどりの旗が浮かんでゐます。カッターのきょうそうの出發線です。沖の方にも、同じやうな旗が小さく見えます。海岸も軍艦の上も、おうえんの水兵さんたちで、いっぱいです。

「おまへたちは、この軍艦の乗組員一同にかはって、きょうそうするのだ。今日は、毎日きたへた力を、ためすことができ

る。みんな心を合はせて、一生けんめい、たふれるまでこぐのだぞ。」

といふ艦長のことばにはげまされて、白組十三人のせんしゅは、カッターに乗りうつりました。日にやけた、まっ黒な顔に、白いはちまきをしっかりしめてみます。ていちょうが、

「かいをひたせ。」

とごうれいを掛けると、

「おう。」

と、掛聲勇ましく、かいをいっせいに水にひたします。やがて、

「ざ、ざ、ざあ。」と、力強く水をかくと、あの太いかいが、弓のやうに曲りました。

出發線に、四そうのカッターが並びました。用意のラッパが

出發線に、四そうのカッターが並びました。用意のラッパが鳴りました。「どん。」と出發のあひづです。

カッターは、いっせいにこぎ出しました。十二本のかいは、まるで一本のかいのやうに、きちんとそろひます。一かきごとに、ぐんぐん早さをまして進みます。はくしゅが、あらしのやうに起りました。

カッターは、だんだん遠ざかって、小さくなりました。旗を立てた船が、たくさん出てゐて、しきりにおうえんをしてゐます。

沖の旗をまはって、四そうのカッターは、だんだん、こちらへ近づいて來ました。

決勝線まで、わづか二百メートルぐらゐになりました。まだ勝ち負けはわかりません。せんしゅは、力いっぱいこいでゐます。ていちょうは、大きな掛聲で、せんしゅをはげましてゐます。最後の百メートルのところで、白が、ぐいぐい出て來ました。

はくしゅが、さかんに起りました。

「どん。」

決勝を知らせるてっぽうの音がしました。

白が勝ったのです。

白のカッターからは、さっと、かいがいっせいに立ちあがりました。十三人のせんしゅの顔は、にこにことうれしさうでし

た。

語法

一、◎かいは、まるで一本のかいのやうに、きちんとそろひます。

◎私の兄は、まるで日本人のやうに、日本語を話します。

二、◎一かきごとに、ぐんぐん早さをまして進みます。

◎一日ごとに、大きくなります。

三、◎十三人のせんしゅの顔は、にこにことうれしさうでした。

◎私は今日たいへんうれしいのです。

二十三　軍犬とね

とねは、小さい時、文子さんのうちで育てられた、勇ましい軍犬です。

文子さんが、ちょうど三年生になったばかりのころ、をぢさんのうちから、子犬を一匹もらって来ました。その親は、軍犬で、戦地ではたらいてゐるさうです。文子さんは、もらった子犬も、りっぱな軍犬にしてみたいと思ひました。

子犬には、とねといふ名をつけました。それは、をぢさんの家のそばを流れてゐる、大きな川の名を取って、おとうさんがおつけになったのです。

おつけになったのです。

文子さんのうちでは、みんな犬がすきでした。とねの来るずっと前にも、犬をかってみたことがあるので、文子さんは、ほんとうによく、とねをかはいがりました。朝夕、からだの毛をすいたり、きれでからだをふいてやったりしました。毎日、きまったやうに、運動をさせてやりました。たべものにもよく氣をつけて、間食などは、できるだけさせないやうにしました。そのために、とねは、子犬のよくかかる病氣にもならないで、すくすくと育ちました。

とねはかしこい犬でしたから、文子さんに教へられると、「おあづけ。」でも、「おすわり。」でも、すぐおぼえました。文子さ

んは、とねがどこへでもついて来るので、かはいくてたまりませんでしたが、ただ學校へ行く時、何べん追ひかへしても、あとからついて来るので困りました。

文子さんは、をぢさんに聞いて、とねに「待て。」を教へました。子犬ですから、これは、なかなか聞きませんでしたが、決してしかったり、たたいたりしないで、少しでもできると、頭をなでてほめてやりました。のちには、文子さんが學校へ行く時、とんで来ても、

「すわれ。」「待て。」

といひますと、ぎょうぎよくすわって、お見送りをするやうになりました。

かうして、その年の秋も過ぎ、冬の初めになりますと、とね

かうして、その年の秋も過ぎ、冬の初めになりますと、とねは、もう子犬ではありませんでした。近所の、どの犬よりも大きく見えました。三年生の文子さんがつれて歩いてみるのに、向かふから来る人は、大人でも、遠くからよけて通るほど、強さうな犬になりました。

お正月が来ると、まもなく、文子さんがねがってみたやうに、とねは、軍犬になることになりました。

出發の前の晩、文子さんは、とねにたくさんごちそうをしてやりました。自分の育てた犬が、いよいよ軍犬になるのだと思ふと、うれしくてたまりませんが、別れるのは、ほんたうにつらいと思ひました。

文子さんは、日の丸の小さな旗を作って、とねの首につけ、寒い日の朝、おかあさんといっしよに、停車場まで見送って行きました。

二

それからのち、とねのかかりの兵隊さんから、ときどき、とねのようすを知らせて来ました。文子さんも、手紙を出しました。

文子さんが、四年生になった秋のころ、兵隊さんから、次のやうな手紙が来ました。

とねは、たいそうりっぱな軍犬になりました。高いかきでも、らくにとびこえます。腹を地につけて、ふせをしたり、川を

泳いで渡ったり、遠くにかくしてある手ぶくろを、すばやく

泳いで渡ったり、遠くにかくしてある手ぶくろを、すばやくさがしあてたりします。もう、軍犬のすることは、何でも出来ます。どの犬にも負けない、りっぱな犬になりました。

あなたから手紙が来ると、それを、とねに見せてやります。とねは、なつかしさうに、にほひをかぎながら目の色をかへて喜びます。あなたが、かはいがっていらっしゃったのと同じ氣持で、私も、とねを一生けんめいで育ててゐます。どうぞ、安心してください。

三

それから半年ほどたって、文子さんが五年生になったころ、とねは、勇ましく北支那へしゅっせいしました。

りこうなとねは、戦場で、敵のみるところをさがしあてたり、夜、ふいに近寄らうとする敵の見はりをしたり、隊と隊との間のお使ひをしたり、何をさせてもすばらしいはたらきをしました。

そのうちに、とねのついてゐる部隊は、何倍といふ敵と、はげしく戦ふ時が来ました。みかたの第一線は、敵前わづか五十メートルのところまでせまって、ざんごうの中から、敵をこうげきしましたが、敵は多数で、弾は雨あられのやうに飛んで来ます。みかたはそのままで、一週間もたたかひつづけましたが、その間、第一線と本部との間をお使ひするものは、軍犬とねでありました。

とねは、毎日、五回も六回も、この間を行ったり来たりしました。首わのふくろに、通信を入れてもらって、

「行け。」

といはれるが早いか、どんなにはげしく、弾が飛んで来る中でも、元氣よくかけ出しました。のちには、敵がとねの姿を見つけて、弾をあびせかけます。それでもとねは、弾の下をくぐるやうに抜けて、走りつづけました。かかりの兵隊さんはもちろん、みんなの兵隊さんが、とねのはたらきを見て、涙を流すほど喜びました。

いよいよ、わが軍が、敵のじん地にとつげきする日が来ました。

午前五時、まだ、あたりはうす暗いころ、とねは、最後の通信を首につけて、

「行け。」

の命令とともに、走り出しました。敵の弾が、うなりをたてて飛んで来ます。とねは、一心に走りました。本部では、とねのかかりの兵隊さんが、まもなく、とねが来るだらうと思って、待ってゐました。すると、向かふの、こうりゃんのあぜ道の間に、とねの元氣な姿が見えました。

「よう し、来い、とね。」

と、兵隊さんは呼びました。

とねは、もう百メートルで、本部へつかうとしました。ちょ

うどその時、敵の弾が、ばらばらと飛んで来ました。とねは、ぱったりとたふれました。

「ようし、来い、来い、とね。ようし、来い、とね。」

と、かかりの兵隊さんは、氣がくるったやうに呼びつづけました。

この聲が通じたのか、とねは、むっくりと立ちあがりました。しかし、もう走る力がありません。かかりの兵隊さんは、敵の弾が飛んで来るのもかまはず、はふやうにかけ出して、とねのからだを、しっかりとだきかかへました。

一時間ばかりののち、わが軍は、勇ましく敵にとつげきして、とうとう、そのじん地をせんりょうしました。

四

とねのてがらは、かかりの兵隊さんから、くはしく文子さんに知らせて来ました。さうして、おしまびに、

とねは、足をやられただけですから、まもなく、よくなることと思ひます。とねは、そのうち、きっとくんしょうを、いただくにちがひありません。

と書いてありました。この手紙を見て、文子さんは、

「まあ、とねが。」

といったまま、つっぷして、泣いてしまひました。

「とねはえらい。感心なやつだ。」

と、おとうさんも涙を流しながら、お喜びになりました。

語　法

一　◎文子さんが、ちょうど三年生になったばかりのころ、
　　をぢさんのうちから、子犬を一匹もらって来ました。
　◎私は學校から歸ったばかりです。
二、◎朝夕、からだの毛をすいたり、きれでからだをふいて
　　やったりしました。
　◎毎日、きまったやうに、運動をさせてやりました。
　◎少しでもできると、頭をなでてほめてやりました。
　◎出發の前の晩、文子さんは、とねにたくさんごちそう
　　をしてやりました。

二十四　稲刈

學校がすむと、すぐ、たんぼへ行きました。今日は、うちの稲刈です。よいお天氣で、あちらでもこちらでも、稲を刈ってゐます。

田のあぜに、むしろを敷いてもらって遊んでゐた弟が、遠くから私を見つけて、

「ねえさん。」

と喜んで呼びました。

「ただいま。」

といって、私はかばんをおろしました。

稲を刈っていらっしゃったおとうさんと、おかあさんは、腰

稲を刈っていらっしゃったおとうさんと、おかあさんは、腰をのばしながら、

「やあ、もう學校がすんだのか。早かったな。」

「そこのかごの中に、おいのがあるから、二人でおあがり。」

とおっしゃいました。

ふかしたさつまいもをかごからだして、弟といっしょにたべました。

稲がだんだん刈られて来るためか、いなごが、たくさんこちらへ飛んで来ます。さうして、稲の葉や莖に止ります。取らうとしても、なかなかつかまりません。

大きなのが一匹すぐそばの稲の葉に止りました。そっと近づ

くと、くるりと葉のうらへまはって、足の先だけ見せてゐます。右の手で、すばやく葉といっしょにつかまへました。左の手で頭のあたりをつかむと、あと足をふんばって逃げさうにしました。あわててぎゅっとつかむとあと足が取れてしまひました。下に置くと、飛べないので、地面をはって行きます。

弟は、いなごを飼ふのだといって、土でかこひをこしらへました。いなごは、せまいかこひの中から、外へはひ出さうとします。

「この牛は、しようがないぞ。」

と、大きな聲で弟がひとりごとをいひます。弟は、牛を飼ってゐるつもりなのです。私は、おかしくなってふきだしました。

赤とんぼが、すいすいと、空を飛んでゐます。

赤とんぼが、すいすいと、空を飛んでゐます。

ざくざくと、稲を刈る音が聞えます。私も何か手つだはうと思って、おとうさんや、おかあさんの方へ行きました。刈つたあとには、くくつた稲のたばが、田の上に並べてあります。

おかあさんは、刈るのをやめて、稲のたばをまとめて、稲かけの方へ運んでいらっしゃいます。私も、少しづつ持って運びました。

一人ぼっちになって遊んでゐた弟が、たいくつして、

「ああん。」

といひました。おかあさんが、

「おまへ、行って遊んでおやり。」

とおつしやつたので、私は、また弟の方へ行きました。
それから、夕方まで、弟といつしよに遊びました。

語法

一　◎田のあぜにむしろを敷いてもらつて遊んでゐた弟が、遠くから私を見つけて呼びました。
◎私は正男君にはがきをポストに入れてもらひました。

二、◎取らうとしても、なかなかつかまりません。
◎いなごは、せまいかこひの中から外へ、はひ出さうとします。
◎學校へでかけようとすると、雨がふつて、來ました。

三、弟は、牛を飼ってゐるつもりなのです。

◎私は今日友達のうちへ行くつもりです。

二十五　祭に友達を呼ぶ

私の村のお祭が近づきました。去年、あなたといっしょにお宮にお参りして、樂しかったことが思ひ出されます。

今年は二十五日のお祭の日がちょうど日曜日になります。二十四日の午後から、ねえさんをさそって、ぜひ來てください。

毎年ある花火は、今度はやめたさうですが、二十四日の晩は、いろいろな店が出てにぎはひます。お祭の日は、しばゐや、すまふがあります。それに今年は、五年めに一度ある牛行列が通

るさうです。牛にきれいな着物を着せ、牛飼が、赤白のたづなを引いて通るのは、まるで繪のやうださうです。

どうぞ、ぜひおいでください。母も、みよ子も、お待ちしてゐます。

十月十八日

ゆり子様

としこ

お手紙ありがたうございます。去年のお祭のことを思ひ出して、急になつかしくなりました。お手紙のことを姉に申しましたら、たいへん喜んで、ぜひ參りたいといってゐます。

久しぶりでおあひして、みなさんといっしょに、お宮へお參

久しぶりでおあひして、みなさんといっしょに、お宮へお参りをしたり、しばゐや、すまうを見たりしたいと思ひます。今年は、めづらしい牛行列が見られるさうですね。今から楽しみにしてゐます。

二十四日の午後三時ごろ、そちらへ参ります。どうぞおかあさんによろしくおっしゃってください。

みよ子さんのおみやげに、わたしの作ったお人ぎょうさんを、持って行ってあげたいと思ひます。さやうなら。

十月二十日

ゆり子

とし子様

語法

一、◎毎年ある花火は、今度はやめたさうです。
◎今年は、五年めに一度ある牛行列が通るさうです。
◎牛にきれいな着物を着せ、牛飼が、赤白のたづなを引いて通るのはまるで繪のやうださうです。
◎今年はめづらしい牛行列が見られるさうですね。

二十六　村祭

村のちんじゅの神様の
今日は、めでたいお祭日。

どんどんひゃらら、
どんひゃらら、
朝から聞える笛たいこ。

としも豊年満作で、
村はそう出の大祭。
どんどんひゃらら、
どんひゃらら、
夜までにぎはふ宮の森。

治る御代に、神様の

めぐみたたへる村祭。
どんどんひゃらら、
どんひゃらら、
聞いても心が勇みたつ。

二十七　たぢまもり

すみにん天皇の仰せを受けたたぢまもりは、船に乗って、遠い、遠い外國へ行きました。

遠い外國に、たちばなといって、みかんに似た、たいそうかをりの高いくだものがあることを、天皇は、お聞きになっていらっしゃいました。たぢまもりは、それをさがしに行くことに

なつたのです。

遠い外國といふだけで、それが、どこの國であるかは、わかりません。ただまもりは、あの國この島と、たづねてまはりました。いつのまにか、十年の月日がたつてしまひました。

やつと、あるところで、美しいたちばながなつてゐるのを見つけました。

ただまもりは、大喜びでそれを船につみました。枝についたままで、たくさん船につみました。さうして、大急ぎで、日本へ歸ることにしました。

「さだめて、お待ちになつていらつしやるであらう。」

さう思ふと、ただまもりには、風を帆にいつぱいうけて走る船

が、おそくておそくて、しかたがありませんでした。

日本へ歸ってみると、思ひがけなく、その前の年に、天皇は、おかくれになっていらっしゃいました。

たぢまもりは、持って歸ったたちばなの半分を皇后にけん上しました。あとの半分を持って、天皇のみささぎにお參りしました。枝についたままの、美しい、かをりの高いたちばなを、みささぎの前に供へて、たぢまもりはひざまづきました。

「遠い、遠い國のたちばなを、仰せによって、持ってまゐりました。」

かう申しあげると、今まで、おさへにおさへてゐた悲しさが、一度にこみあげて胸は、はりさけるばかりになりました。たぢ

まもりは、聲をたてて泣きました。

たゞまもりは、昔、ちょうせんから日本へ渡って來た人の子孫でした。しかし、だれにも負けない忠義の心を持ってゐました。

泣いて泣いて、泣きとほしたゞまもりは、みささぎの前にひれふしたまま、いつのまにか、つめたくなってゐました。

語法

一、◎枝についたままで、たくさん船につみました。

◎くつのままで、あがってはいけません。

◎ねまきのままで、ごはんを食べるのはわるいのです。

二、◎風を帆にいっぱいうけて走る船が、おそくてしかたがありませんでした。

◎私は頭が痛くてしかたがありません。

二十八　南洋

今日は日曜日で、忠次さんのうちに、げんとう會がありました。

正男さんも、太郎さんも、次郎さんも、花子さんも、春子さんも、ゆり子さんも、みんな集りました。

忠次さんのおとうさんは、にこにこにこして、

「今日は、おもしろい南洋の寫眞を、うつしてあげませう」。

といはれました。

といはれました。

黒い紙をはって、部屋を暗くしました。かべには、白い布がはってあって、それに、南洋のけしきが次から次へとうつって行きました。

いちばん初めに、美しい日の丸の旗のひらめいてゐる昭南島のけしきがうつりました。

「どんなことがあっても落ちないと、イギリスがいばってゐたシンガポールも、日本の勇ましい兵隊さんたちによって、攻め落されてしまひました。名も、昭南島とあらためられて、日の丸の旗が、南の空にひるがへってゐるのです。」

と、忠次さんのおとうさんが説明されたので、みんなはうれし

くてたまりませんでした。

青い海に、静かにかげをうつしてゐるやしの木の寫眞がうつりました。

「南洋の海は、明かるくてまつさをですから、着物でもひたしてそめたいと思ふほどの美しさです。その海にかげをうつすのがやしの木で、こんなけしきは、南洋のどこへ行っても見ることが出來ます。」

寫眞がかはりました。

あたり一面に、ぱっと白い花をまき散らしたやうです。

「あっ、らっかさん部隊だ。」

「まあ、きれいですこと。」

と、忠次さんと、花子さんがいっしょにいひました。

と、忠次さんと、花子さんがいっしょにいひました。

「勇ましい日本のらっかさん部隊が、スマトラの空から、地上へおりて行くところです。」

かういって、忠次さんのおとうさんは、スマトラを始め、南洋からたくさんのせきゆが出ること、せきゆは飛行機を飛ばせたり、自動車や船を走らせたりするのに、なくてはならないものであることを、お話しになりました。

「をぢさん、ゴムも南洋から出るのでせう。」

と、正男さんがたづねました。

「さうです。世界中のゴムの大部分は、南洋から出るのです。では、ゴムの木をうつしませう。

木のみきにすぢがつけてあるでせう。そのみぞをつたはって、ぽたりぽたりと落ちる木の汁を、茶わんのやうなものに受けます。それを集めて、かためると、ゴムができるのです。あなたがたが使ふ消しゴムや、ゴムまりも、はるばる南洋から海を渡って来たゴムで作ったものです。」

また、ちがった寫眞が出ました。

「何だらう。まるで、大きなおぼんが浮いてゐるやうだなあ。」

と、太郎さんが、大きな聲でいひました。

「めづらしいでせう。これは、ジャワの植物園にある鬼ばすといふ大きなはすです。葉のさしわたしが一メートルもあって、南洋の小さな子どもが、よく葉の上に乗って遊びます。」

「をぢさん、鬼ごっこは出来ませんか。」

「をぢさん、鬼ごっこは出来ませんか。」
と次郎さんがいったので、みんなが笑ひました。
「鬼ごっこは出来ないでせう。」
と、忠次さんのおとうさんも笑ひながら、
「さあ、次には、あなたがたのすきな動物をうつしませう。何がうつるか、あててごらんなさい。」
といはれました。
「わにかな。」
と、まっ先にいったのは忠次さんでした。
「くじゃくかしら。」
と春子さんがいひました。

「あっ、ぞうが出た。」

次郎さんは、うれしさうな聲でさけびました。

「これは、タイ國の寫眞です。よくなれたぞうが、大きな材木を、運んでゐるところです。」

正男さんがいひました。

「南洋は、かはってゐて、おもしろいところですね。ぼく、行ってみたくなりました。」

みんなもさう思ひました。

すると、その時、寫眞がかはって、田植をしてゐるところがうつりました。

「日本の寫眞ね。」

と、ゆり子さんがいひました。

忠次さんのおとうさんは、

「なるほど、日本によく似てゐますね。しかし、これも南洋の田植です。日本と同じやうに、南洋でもお米を作つてゐるのは、おもしろいことではありませんか。これから、しつかりと手をつないで行く日本も、みんなお米のできる國なのです。それでは、今日のげんとう會は、これでおしまひにしませう。」

といはれました。

黒い紙を取りのけると、今まで暗かつた部屋が、ぱつと明かるくなりました。空は、青々とすみきつてゐました。

語　法

一、◎日本の勇ましい兵隊さんたちによって、攻め落されてしまひました。

◎名も昭南島とあらためられました。

二十九　雪の日

雪が降って、あたりが明かるくなりました。

學校へ行く時、雪の上を歩いて行きました。ふり返って、足あとを見ると、くねくねと、曲ってついてゐました。向かふから、友田くんと小野くんがやって来ました。

「おはやう。」
「おはやう。」
三人が並んでまた雪の上を歩くと、足あとも、並んでつきました。學校の中は、窓も、ろうかも、雪で明かるくなつてゐました。

體操の時間になりました。外に集るやうにと、先生がいはれました。きつと、雪がつせんをするのだらうといつて、みんな喜びました。

「集れ。」
先生の大きな聲がしました。みんなは、雪の上に集つて並びま

「今日は、雪がっせんをする。前列は赤、後列は白。」
と先生がいはれたので、みんなは両方に分れて、それぞれじん地につきました。
「城を作れ。」
のごう令で、両軍は、一生けんめい、雪のかたまりをこしらへては、それを積み重ねました。高さ一メートル半ばかりの山を作って、その上に、旗を立てるのです。山は、たちまちできあがりました。先生は、両方の山の高さをはかられました。
みかたの城には、赤い旗がひるがへり、敵の城には、白い旗がなびいてゐました。
友田くんも、小野くんも、今日は敵です。にこにこしてこちらを見てゐます。

らを見てみます。

「たまを作れ。」

みんなは、雪のたまを、いくつもいくつもこしらへました。やがて先生が、

「笛を鳴らしたら、たまを投げる。次に進めのごう令を掛けたら、こうげきを始める。」

といはれたので、みんなは、雪のたまをかかへました。

「ぴりー——。」と、笛が鳴りました。「わあ。」といひながら、たまを投げ始めましたが、とどきません。少しづつ前進しました。ぼくは、友田くんをめがけて投げました。うまく頭のところへ飛んで行きましたが、友田くんが、ひょいとしゃがみましたの

で、それてしまひました。友田くんも、ぼくをねらひました。今度こそ、うまくあててやらうと、力いっぱい投げてやりました。そこへ、どこからかたまが飛んで来て、ぼくの胸にあたりました。「ようし。」といひながら、たまをつかんだ時、「進め。」のごう令がかかりました。

　両軍は、「わあ。」といって、かけて進みました。敵の城の旗を取れば、勝つのです。しかし、城を守ってゐる隊もゐますから、すぐには取れません。白い旗は、すぐ、目の前にひらひらしてゐますが、手がとどきません。守る隊も、一生けんめいです。ぼくが、山をのぼりかけると、両足をしっかりとつかまへて、引っぱる者がありました。見ると、小野くんでした。ぼくがこ

ろぶと、二三人が、ばたばたと倒れかかって来ました。やっと起きあがりましたが、まだ、白い旗がひらひらしてゐました。みかたはと思って、ちょっとふり返ると、赤い旗も、まだ立ってゐました。

「今のうちだ。」

と元氣を出して、みかたの三人が、しっかり腕を組んで進みました。三人のうち、だれか一人が、雪の山にのぼって、旗を取るのです。ぼくは、まっ先にのぼりかけました。むちゅうになってよじのぼると、とうとう、旗に手がとどきました。ぼくは、山の上に立ちあがって、その旗をふりました。

「萬歳。」

と、みんなが、喜びの聲をあげました。

笛が鳴ったので、兩軍は、もとのところに並びました。先生は次のやうにいはれました。

「今日は赤の勝ち。しかし、どちらもよく戰った。この次に雪が降ったら、またやることにする。わかれ。」

どやどやと、みんなが、ぼくのところへ寄って來ました。

「うまくやったなあ。」

といって、ぼくの肩をたたく者がありました。友田くんでした。

「今度は、ぼくが取って見せるぞ。」

と、小野くんがいひました。

いつのまにか、空がくもって、雪がさかんに降りだして來ま

した。

ぼくは、小野くんと友田くんと、仲よく教室へ帰って行きました。

語法

一、◎外に集るやうにと、先生がいはれました。

◎先生は、両方の山の高さをはかられました。

二、◎敵の城の旗を取れば、勝つのです。

◎も少し前進すれば、手がとどきます。

三十　すがはらのみちざね

てんじん様にまつられてゐるすがはらのみちざねといふかたは、生まれつきかしこい人でした。その上、小さい時から、よく勉強しましたので、のちには、たいへんりっぱな人になりました。學問では、みちざねの上に出る人はないと思はれてゐました。

ある時、みやこのよしかといふ人の家で、弓の會がありました。若い人たちが、大勢その家に集って、かはるがはる、まとをめがけて弓を引いてゐるところへ、みちざねもやって來ました。すると、人々は、

「あの人は學問はできるが、弓はどうだらう」。

「さあ、どうだらうな。」
「だめ、だめ。机の上の勉強ばかりで、腕はせんこうより細いんだ。」
などと、小さな聲で、ささやき合ひました。
いつも、學問では、とてもかなはないみちざねを、今日は弓でいぢめてやらうと思ったのでせう、一人の若い男が、進み出て、
「どうです。あなたも、弓をおやりになりませんか。」
といひながら、弓と矢を、みちざねにつきつけました。
おそらく、しりごみするだらうと思はれたみちざねは、その弓矢を靜かに受取り、前へ進んで、身がまへました。すると、

今まで、やさしさうに見えたみちざねが、急にがっしりと強さうに見えだしました。

あたりはしんとして、せき一つする者もありません。

「ひゅう。」と音高くつるからはなれた矢は、「ぽん。」と、まとのまん中の星を、射抜いて立ちました。

みちざねは、つづいて、第二の矢を引きしぼりました。

これもみごとに、ちょうど第一の矢とすれすれに並んで、まん中を射抜きました。

第三、第四、第五と、みちざねは、目にもとまらぬ手早さで、矢をつがへ、矢をはなちました。まとをはづれる矢は一本もありませんでした。

みんなは、ただよったやうになって、大きなため息をつくば

みんなは、ただよったやうになつて、大きなため息をつくばかりでした。

語　法

一、◎學問ではみちざねの上に出る人はないと思はれてゐました。

◎みちざねを、今日は弓でいぢめてやらうと思つたのでせう。

◎おそらく、しりごみするだらうと思はれたみちざねは、その弓矢を静かに受取りました。

三十一　ことばづかひ

つつしみの心を持ち、ぎょうぎよくするためには、まづ、毎日のことばづかひに氣をつけなければなりません。ことばづかひがぞんざいであれば、人がらがわるく見えます。私たちは、目上の人をそんけいし、ていねいなことばをつかふやうにしなければなりません。

とくに、皇室の御事については、最もていねいなことばをつかはなければなりません。つつしみ深い心をことばにあらはすのが、日本人のすぐれた點です。

また、友だちと、お話する時にも、ことばづかひに氣をつけ

ることが、大切であります。いつも、はきはきしたことばで、元氣よく、ものをいはなければなりません。しかし、元氣よくしようとして、ことばがらんぼうになったり、人の話を聞かないで、自分だけ話しかけたりして、相手をおもしろくない心にさせるのは、よくないことです。

手紙を書くのも、話をするのと同じことです。ことばづかひに氣をつけるのはもちろん、文字もていねいに、はっきりと書くことが大切であります。

手紙を受取った時には、決してそまつにせず、返事を出さなければならないものには、すぐに出すやうにしなければなりません。返事を出さないのは、話しかけられて、返事をしないの

と同じことです。

したしくなると、私たちは、ぎょうぎよくすることを忘れて、ことばづかひもそまつになりやすいものですが、これは、よく氣をつけなければならないことであります。

語法

一、◎毎日のことばづかひに、氣をつけなければなりません。

◎私たちは、目上の人をそんけいし、ていねいなことばをつかふやうにしなければなりません。

◎とくに、皇室の御事については、最もていねいなことばをつかはなければなりません。

二、◎手紙を書くのも、話をするのと同じことです。
◎返事を出さないのは、話しかけられて、返事をしないのと同じことです。

三十二　ようろう

村の人が、二人で話をしてゐます。

村の人一「もみぢが、きれいになりましたね。」

村の人二「たきのあたりは、ずいぶんみごとでせう。」

村の人一「あなたは、あの感心な子どものうはさをお聞きですか。」

村の人二「ああ、あのいつも、たきぎをせおって歩く子どものことでせう。毎日山へ行って働いて、帰りには、年取ったおと

うさんのすきなものを、いろいろ買って来るさうですね。」

村の人ニ「さうです。その子です。その子について、このごろ、ふしぎな話があるのです。」

村の人ニ「どういふ話ですか。」

村の人ニ「なんでも、その子が、山で酒の流れてゐるところを、見つけたといふのです。」

村の人ニ「なるほど、それはふしぎな話ですね。」

村の人ニ「きっと、子どものまごころが、神様にとどいたのだらうと、みんながいってゐます。」

村の人ニ「それにちがひないでせう。」

村の人ニ「おや、向かふから、あの子がやって来ましたよ。」

そこへ、たきぎをせおった子どもが、出て来ます。

子ども「こんにちは。」

村の人一「こんにちは。」

村の人二「よくはたらきますね。」

子ども「いや、まだ役にたちません。」

村の人二「おとうさんは、元氣になられましたか。」

子ども「ありがたうございます。うちで少し仕事をしてをります。」

村の人一「それは何よりです。あなたは、山で酒を見つけたさうですが、ほんとうですか。」

子ども「はい、ほんとうでございます。この間、私が、山でたきぎを拾ってゐますと、足がすべってころびました。起きよ

うとすると、そのへんに、酒のにほひがいたします。ふしぎなことだと思って、あたりを見ますと、石の間から、水が流れ出てをります。それが酒でございましたので、父のみやげに持って帰りました。」

村の人一「それは、めでたい話だ。あなたの孝行のためですよ。あ、おとうさんをだいじにしておあげなさい。」

子ども「ありがたうございます。では、ごめんください。」

子どもは、おじぎをして帰ります。

村の人一「感心な子どもですね。」

村の人二「ほんとうに。」

二人の村の人は、子どもの後姿をじっと見てゐます。

そののち、この親孝行な子どもの話が、廣く傳はりました。
天皇が、それをお聞きになつて、わざわざ、そのところへお出ましになりました。
さうして、子どもの孝行をおほめになつて、年ごうを、よううろうとお改めになりました。

語法

一、◎どういふ話ですか。
　◎その子が、山で酒の流れてゐるところを、見つけたといふのです。
二、◎たきぎをせおつて歩く子どものことでせう。

◎きっと、子どものまごころが、神様にとどいたのだらうと、みんながいってゐます。

◎それにちがひないでせう。

三十三　山田ながまさ

今から三百二十年ばかり前に、山田ながまさは、シヤムの國へ行きました。シヤムは、今のタイ國であります。

そのころ、日本人は、船に乗って、さかんに南方の島々國々に往來し、たくさんの日本人が移って、いたるところに日本町ができました。シヤムの日本町には、五千人ぐらゐ住んでゐたさうです。

二十何歳でシヤムへ渡つたながまさは、やがて日本町の頭に

二十何歳でシャムへ渡ったながまさは、やがて日本町の頭になりました。勇氣があり、正直で、男らしい人でした。

シャムの國王は、ソンタムといって、たいそうえらい方でした。

ながまさは、日本人の義勇軍をつくり、その隊長になって、この國のために、たびたびてがらを立てました。

國王は、ながまさを武官にし、のちには、一番上の武官の位置に進めました。

日本人の中で、たいへん強くて、勇氣のあるものが、六百人ばかりながまさの部下になってゐました。ながまさは、これら日本のさむらひとたくさんのシャムの兵隊をつれて、いつも、

勇ましく戦に出かけました。な
な車に乗り、シャムの音樂を奏しながら、都にかへって來る時
は、見物人で、どの町もいっぱいだったさうです。
　ながまさは、かうして、この國のために、しばしばてがらを
たて、高い位にのぼりましたが、その間も、日本町のために働
き日本へ往來する船の世話をし、海外ぼうえきをさかんにする
ためにつとめました。地位が高くなってからは、ほとんど毎年
のやうに、船を日本へ送ってみました。
　ながまさがシャムへ渡ってから、二十年ばかり過ぎました。
えらかったソンタム王もなくなり、年若い王子が、國王になり
ました。そのころ、シャムのナコンといふ地方がよく治りませ

んでした。そこで、國王は、あたらしくながまさをナコン王にしました。

そのため、王室では、さかんな式があげられました。まだ十歳であつた國王は、とくに國王のと同じ形のかんむりをながまさに授け、金銀やたからものを、山のやうに積んで與へました。

ながまさは、いつものやうに、日本のさむらひとたくさんのシャムの兵隊をつれて、ナコンへ行きました。すると、ナコンは、強いながまさに恐れて、たちまち王のいひつけをきくやうになりました。

をしいことに、ながまさは、ナコン王になってから、わづか一年ばかりでなくなりました。

ながまさは、日本のどこで生まれたか、いつシャムへ行ったかもはっきりわかりません。それが、一度シャムへ渡ると、日本町の頭となり、海外ぼうえきのえらい人になっただけでなく、その國の高い地位について、正しい日本人の姿を、南方の國々に示しました。外國へ行った日本人で、ながまさほど高い地位にのぼり、日本のために又南方のために働いた人は、ほかにないといってもよいでせう。

語法

一、◎今から三百年ばかり前に、山田ながまさは、シャムへ行きました。

◎日本人の中で、大へん強くて、勇氣のあるものが、六

◎日本人の中で、大へん強くて、勇氣のあるものが、六百人ばかり、ながまさの部下になってついてゐました。

三十四　三勇士

「だーん、だーん。」

おそろしい大砲の音とともに、あたりの土が、高くはねあがります。機關銃の彈が、雨あられのやうに飛んで來ます。

昭和七年二月二十二日の午前五時、びょうこうの敵前、わづか五十メートルの所です。

今、わが工兵は、三人づつ組になって、長いはかいとうをかへながら、敵の陣地を、にらんでゐます。

見れば、敵の陣地には、いっぱいにてつじょうもうが張られてゐます。このてつじょうもうにはかいとうを投げこんで、わが歩兵のために、突撃の道を作らうとしてゐるのです。その突撃まで、時間は、あと三十分しかありませんでした。

工兵は、今か今かと、命令のくるのを待ってゐます。しかし、この時撃出す敵の弾には、ほとんど、顔を向けることができません。すると、わが歩兵も、さかんに機關銃を撃出しました。さうして、敵前一面に、もうもうと、えんまくを張りました。

「前進。」

の命令がくだりました。待ちつづけてゐた第一班の工兵は、勇んでてつじょうもうへ突進しました。

十メートル進みました。二十メートル進みました。あと十四

十メートル進みました。二十メートル進みました。あと十四メートルでてつじょうもうに着く時、張られたえんまくが、だんだんうすくなって来ました。

一人倒れ、二人倒れ、三人、四人、五人、と次々に倒れて行きます。第一班は、残念にも、とうとう成功しないで終りました。

第二班に、命令がくだりました。

敵の弾は、ますますはげしく、突撃の時間は、いよいよちかづいて来ました。今では、はかいとうを持って行って、てつじょうもうにさし入れてから、火をつけるのでは、とてもまにあひません。そこで班長は、まづはかいとうの火なはに、火をつ

けることを命じました。

作江伊之助、江下武二、北川烝、この三人の工兵は、火をつけたはかいとうをしっかりとかかへ、てつじょうもうめがけて突進しました。

北川が一番先に立ち、江下、作江が、これにつづいて走ってゐます。

すると、どうしたのか、北川がきゆうに倒れました。つづく二人も、それにつれてよろめきましたが、二人は、ぐっとふみこたへました。もちろん、三人のうち、はかいとうをはなしたものは一人もありません。ただその間にも火は、火なはを傳はって、ずんずんもえて行きました。

北川は、決死の勇氣を出してすっくと立ちあがりました。江下、作江は、北川をはげますやうに、はかいとうに力を入れて、あとから押して行きました。

三人の心は、持つた一本のはかいとうを通じて、一つになつてゐました。しかも、數秒ののちには、そのはかいとうが恐しい勢でばく發するのです。

もう、死も生もありませんでした。三人は、一つのばく彈となつて、突進しました。

めざすてつじょうもうに、はかいとうを投げこみました。ばく音は、天をゆすり地をゆすつて、おそろしくとどろき渡りました。

その時、わが歩兵の一隊は、突撃に移りました。
班長も、部下をさしづしながら進みました。そこに、作江が倒れてゐました。
「作江、よくやったな。いひ残すことはないか。」
作江は答へました。
「何もありません。成功しましたか。」
「何もありません。成功しましたか。」
班長は、撃破られたてつぽうの方へ、作江を向かせながら、
「そら、大隊は、おまへたちの破ったところから、突撃して行ってゐるぞ。」
とさけびました。

「天皇陛下萬歳。」

作江はかういって、静かに目をつぶりました。

漢字一覧表

1.（　）のなかはまへに習つた漢字。

2.重出文字はよみかへ漢字。

二、國（クニ）、姿（スガタ）、船（フネ）、立（タ）てる、暖（アタタカ）く、記念（キネン）、心（コヽロ）、兵士（ヘイシ）、

三、（天）皇陛下（テンノウヘイカ）、治（ヲサ）める、千萬（センマンネン）（年）、意味（イミ）、（先）祖（センゾ）、皇室（コウシツ）、式（シキ）、正（タダ）しい、身（ミ）、戰（センチ）（地）、（兵）隊（ヘイタイ）、涙（ナミダ）、感（カン）じる、

四、（矢）車（ヤグルマ）、尾（ヲ）、

五、待（マ）て、（大）男（オホヲトコ）、刀（カタナ）、

六、（大）勢（オホゼイ）、兄弟（キヨウダイ）、仲間（ナカマ）、落（オト）す、

て、初（ハジ）め、顔（カホ）、胸（ムネ）、泳（オヨ）いで、行列（ギヨウレツ）、頭（アタマ）、親（オヤ）、蛙（カヘル）、過（ス）ぎ

陸（リク）、兩（リヨウ）わき、破（ヤブ）れて、息（イキ）、岸（キシ）、曲（マ）げて、

七、植（ウ）ゑる、咲（サ）く、穗（ホ）、

七、植(ウ)ゑる、咲(サ)く、穂(ホ)、
八、(大)砲(タイホウ)、沈(シヅ)める、進(スス)む、
九、竹(タケ)、嫁(ヨメ)、泣(ナ)く、迎(ムカ)へ、お別(ワカ)れ、安心(アンシン)、(引)止(ヒキト)める、守(マモ)る、
十、戸(ト)、忘(ワス)れる、拜(ヲガ)んで、包(ツツ)む、
十一、受(ウ)ける、窓(マド)、孝行(コウコウ)、娘(ムスメ)、(一)匹(イッピキ)、畠(ハタケ)、土(ツチ)、深(フカ)い、墓(ハカ)、火(ヒ)、灰(ハヒ)、
十二、時計(トケイ)、授(業)(ジュギョウ)、(時)間(ジカン)、運動(ウンドウ)、
十三、入營(ニュウエイ)、青(年)(セイネン)、服(フク)、送(オク)られて、
金(キン)すぢ、(兵)(ヘイ)舍(シヤ)、休(ヤス)む、
十四、愛(馬)(アイバ)、(馬)(ウマ)屋(ヤ)、洗(アラ)ひ、
十五、席(セキ)、掛(カ)ける、(西)(ニシ)町(マチ)、(近)(チカ)寄(ヨ)る、勇(氣)(ユウキ)、
(軍)(グンジン)人、新(アタラ)しい、星(ホシ)、
えい(兵)(ヘイ)所(ジヨ)、腰(コシ)、(立)(タテ)札(フダ)、
賴(タノ)む、

十六、兎（ウサギ）、多（オホ）い、毛（ケ）、痛（イタ）くて、
十七、岩（イハ）、眺（ナガ）めて、神（カミ）（様（サマ））、
十八、吸（ス）ふ、
十九、つり竿（ザヲ）、糸（イト）、板（イタ）、荷（ニ）（車（グルマ））、
二十、許（ユル）して、（日（ニチ））曜（ヨウビ）（日（ビ））、唱歌（ショウカ）、茂（シゲ）る、川原（カハラ）、停（テイ）（車（シャ））場（ジョウ）（鐵（テツ））橋（キョウ）、（船（セン））頭（ドウ）、鳴（ナ）らす、（向（ム））かふ側（ガハ）、茶（チヤ）（色（イロ））、煙（ケムリ）、干（ホ）す、
二十一、晴（ハレ）、起（オ）きる、以上（イジョウ）、體操（タイソウ）、行進（コウシン）、火（カ）（曜（ヨウビ））日（ビ））、作（サギョウ）（業（ギョウ））、
二十二、（先（セン））週（シュウ）、抜（ス）く、汗（アセ）、しみ、朝（チョウ）（禮（レイ））、虫（ムシ）、木（モク）（曜（ヨウビ））日（ビ））、買（カ）ふ、いもん文（ブン）、樂（タノ）
二十三、（軍（グンケン））犬、育（ソダ）てる、（間（カンショク））食、教（ヲシ）へる、秋（アキ）、冬（フユ）、（手（テ））紙（ガミ）、腹（ハラ）、
二十四、（軍（グン））艦（カン）、沖（オキ）、（海（カイガン））岸、（軍（グン））艦（カン）、太（フト）い、最（サイゴ））後（ゴ））、（乗（ノリクミイン））組員（イチドウ）同、（艦（カンチョウ））長、
二十五、（室（シツ））、明（メイ）治（ヂ）、音樂（オンガク）、

二十三、(軍)犬、育てる、(間)食、教へる、秋、冬、(手)紙、腹、喜び、半(年)、支那、部(隊)、(何)倍、第(一線)、(敵)前、

二十四、多數、彈、飛んで、(五)回、命令、

二十五、稻刈、數いて、莖、飼ふ、運ぶ、

二十六、祭、友達、去(年)、午(後)、店、繪、姉、參りたい、

二十七、笛、豐(年)、(滿)作、宮、御(代)、

二十八、仰せ、似る、帆、(皇)后、供へる、子孫、忠義、

(南)洋、寫眞、部(屋)、暗い、布、昭(南)島、説(明)、靜かに、

二十九、散る、飛(行)機、汁、消す、植物園、材(木)、

降る、後(列)、重ねる、投げる、倒れる、腕、萬歲、肩、

歸る、

三十、勉強（ベンキヨウ）、（學）（ガク）問（モン）、机（ツクエ）、
三十一、最（モツト）も、點（テン）、（大）（タイ）切（セツ）、返事（ヘンジ）、
三十二、酒（サケ）、仕事（シゴト）、改（アラタ）める、
三十三、往來（オウライ）、移（ウツ）つて、（正）（ショウ）直（ジキ）、武官（ブカン）、位置（イチ）、奏（ソウ）す、授（サツ）ける、
銀（ギン）、積（ツ）む、與（アタ）へる、恐（オソ）れる、頭（カシラ）、示（シメ）す、働（ハタラ）く、
三十四、（機）（キ）關銃（カンジユウ）、（昭）（ショウ）和（ワ）、張（ハ）る、歩（ホ）（兵）（ヘイ）、突撃（トツゲキ）、撃（ウ）つ、（前）（ゼン）進（シン）、
（第一）（ダイイツ）班（パン）、殘（ザン）（念）（ネン）、成功（セイコウ）、
秒（ビヨウ）、答（コタ）へる、傳（ツタ）つて、（決）（ケツ）死（シ）、押（オ）して、數（スウ）

昭和十八年十一月廿五日　印刷
昭和十八年十一月三十日　發行

不許翻印

編纂者　内務部文教局
印刷者　ジヤカルタ印刷工場
發行者　ジヤワ軍政監部